

こゝに平生奥山とは犬と猿との間とも云ふべき里見十左衛門重勝と云ふがあつた。高六百石の武士で義山公並に綱宗の二君に事へ久しく目付けをして居た。最後に扈從頭にまでなつた男であるが、其時分はもう退隱して居つた。扈從頭と云へば君側の重役であつて、申さば君侯の仰を取次ぎする大切の役であつたから、随分一時は幅の利けたものに相違ない。此人は其頃既に藩の先輩であつて、年は取つて居るし、氣象は例の寛永武士故、武骨一途で、勇氣があつて腕力が逞しかつたから、藩の若い者も自然此人を見習ふと云ふやうな位置であつた。それに忠義は持つて生れた性分といふばかりでなく、一體何事にも黙つて居られない八ヶ間しい男であつて、特に御家の爲めと云ふことは一日も忘れず、常に奉行などの處置に氣を付けて、悪い事があれば齒に衣着せず、ぶん／＼小言を云ふといふ様な人格であつたから、執政の役人から見れば随分迷惑な厄介な老父であつた。然るに此重左衛門は奥山が大嫌ひである。奥山のやうな傲慢な我儘ものを老臣にして置いては、御家の爲めにならないと思つたものだから、しきりに奥山をいぢめた。或時は奥山の眼の前で奥山を悪口して赤面させたこともある。また或時は伊東新左衛門重義と云ふ大身の武士と相談して奥山の悪事を兵部に申出で、斯様なものは早く退役させたが善からうと云つた。斯様な大身や故老の反對が有つたので兵部少輔も止むを得ず奥山をやめさせることにし、その代りに、一度奥山に蹴落された茂庭周防を再老臣にした。

奥山大學がやめさせられた事については尙ほ其時の様子を委しく考へてみねばならぬ。一體前にも云つた通り、田村右京亮は病身であつたゆゑ、大抵の事は兵部少輔にまかせて置いたとは云

一 奉行 諸藩で家老に相當する仙臺藩の役職。藩政執行者としては最高職で藩主直轄。

ふもの、併し乍ら兎に角後見役の一人だから何事につけても責任をもつて居る。それから立花左近將監は綱宗の義兄にあたるによつて、此人も萬事の相談にあづかる譯である。現に奥山大學が伊達の本家の別家に對する六ヶ條の不平を申立てた際にも、先づ此の立花の同意を得てか、つたやうなもので、重大な事には必ず口を利く人であつた。それゆゑに當時伊達家の政治は申さば兵部少輔と田村右京亮とそれに立花左近と、此の三人の三頭政治であつたと見ねばならぬ。此の三頭の下に幾多の奉行どもが居つて互に睨み合つてごた／＼揉めたのであるから、なか／＼何うも始末にいけないのである。當時奉行の中で最も勢力の強かつたのは、無論奥山大學であつた。奥山は初め茂庭一黨の者どもと勢力を争ひ、遂に茂庭を追除けてその跡を乗取り、これに代つて掻き廻すやうになつたのであるが、誰でも多年長く政治をやつて居れば自然いろ／＼の過失も出来る。随つて世間から非難を蒙るのは自然であつて、誰がやつても同様に免れぬことである。そこで茂庭の一黨が奥山の政治に非難をうつて、之れに反對することがだん／＼強くなつて來た。奥山は一個人として追々不人望を招いたばかりでなく、今一は伊達家の財政の六ヶしくなつたことが、奥山をしていろ／＼非難をうけるやうな事まで餘儀なく敢てせねばならぬ羽目に陥らしたので、其の爲めに不人望になつたのであると云つていゝのである。尤もこの時分はいづれの藩でもみな財政が困難になつたので、獨り伊達家のみがさうなつたのではないけれども、殊に伊達家の財政にとりて大打撃となつたことが一つ二つある。その一つは前にいつた明暦の大火に屋敷が荒増焼けてしまつて、これを建て替るのに金のかゝつたことであつて、此時家中の家來から少からぬ用金を取立てられたので、家中のものが大に困り果てたのである。昔は大名が直接に百姓町人をいぢめることをしなかつたものであつて、大名から幕府へ出す誓詞のうちにも百

二 用金 幕府または大名が臨時の支出をまかなふために、領民から取立てた金銭。

姓町人を撫育して取締の出来るやうに致しませうといふことを書いたものである。若し百姓町人をこまらして、それが爲め彼等に大にさわがれでもした時分には、却つて飛んだ酷い眼に逢はねばならぬからして、つまり百姓町人の方から出るにしても、直接にはいぢめないで家中の者から用金を取り立てたのである。兎に角明暦の大火の後の伊達家の屋敷普請といふものが、確かに伊達家の財政を困難にした一つの重なる原因であつたといはねばならぬ。今一つは例の小石川より和泉橋までの溝を浚渫つて土手を作る普請である。この工事についても家中の家來から用金を取立てたが、家中の用金だけでは何うしても足りないで、其爲めに止むを得ず上方の商人から米を抵當にして高い利息のくふ金を假りて、どうかかうか漸く其普請をやつた。これが爲めにも亦段々財政の困難が甚だしくなつて來たのである。

そこで奥山は様々手をかへて苦しい遣り繰りをして年々の財政仕末をつけて來たが、其内表面にあらはれた事で非難をうけたことの一つは新田開墾である。即ち山を掘りくづしたり、沼を埋め立てたりなどして、新に田畑を開くのである。是はどの藩でも財政上の必要からしてよく行つてみたことがあるけれども、しかし古田の持主からは、其の爲めに堤防が切れるやうになつたとか、或は水が減つて作がとれないとか、何んとかいふ苦情が必ず續々出るのである。奥山は先づこの新田開墾を行つて非難をうけた。處でそれよりも尙一層ひどく非難をうけたことがある。それは米穀の輸出を禁止したことである。即ち仙臺藩で出來る米穀を他藩へ賣出すことを禁じたのであつて、さうすると米穀が必ず安くなる。その安い米を藩で買入れて、それを藩外へ賣出して藩の收入をふやすといふ政策をやつたのである。これが奥山の不人望になつた最も重なる原因の一である。

譬へば天保の水野越前守にした所が、松平越中守の寛政の儉政を學んで、幕府の政治をあれ程まで改革した實にえらい人であつたけれども、無論仕事をすれば之れに伴ふ非難といふものが附纏うた。水野は幕府の國防設計と財政とを整理する爲めに、江戸大阪近傍にある旗本の知行を他の所に取換へて、それを幕府の直轄にしようとした。事此に至れば直に自分たちの囊中に關係する直接の問題であつたから、徳川旗本の非難攻撃といふものが沸くが如くなつて、此反對の輿論を抑へきれないのでとうとう其職を罷めることになつた。世間の奢侈を禁ずるとか、風俗を取締るとかいふ位のうちは、其事がいかに厳し過ぎても、譬へば表皮を擦り剥かれるほどの感じだけれども、愈々問題が飯櫃の底にひびいて來て、眞皮の下の肉を嚙ぢられる段になると、如何に我慢強い男でも蔭で惡口いふ位のことですまして措けぬ。流石の水野越前守もこゝに至つて輿論の槍玉にあげられてしまつたのである。

奥山大學の位置の持ちきれなくなつたのも、やはり水野越前守の場合と同じ所がある。奥山が財政の困難なる爲めにいろ／＼の政策をやつてみても何うしても足りない處からして、今度はせつば詰つて詮方なく仙臺家中の武士に加役を申し付けると云ふ案を立てた。加役といふのは即ち家來の家祿のうちから其幾分の一かを藩の經濟に取上げることであつて、奥山はそれを實行しようとしたのである。それでなくてさへ以前から議論の沸騰してゐた所であるから、こゝに至りては溢れた川の土手が一時に潰れたやうに反對論が起つて何處で喰止めるといふことも出来なくなつた。一口にいへば奥山の悪く云はれたのは財政上のやりくりの爲めである。元來奥山に反對する一派はいつか／＼と久しく機會を狙つてゐたのである。しかし奥山をば兵部少輔が信任して居るし、立花左近も固より信任して居るからして、其位置はまことに堅かつたのである。さ

れどもこゝに一の隙が出來た。それは、奥山は例の六箇條の事柄をあげ、伊達家の不平を代表して言はゞ兵部少輔に喰つてかゝり之れと喧嘩したことである。此に於て奥山の反對黨は今こそ大に乘すべき機會であるといふので、奥山を烈しく攻撃し出した。奥山の反對者は前にもいふ通り無論茂庭の一黨である。茂庭を中心として、その周圍に原田甲斐、富塚重信、伊東新左衛門、里見十左衛門などがあつた。しかしこれらばかりでは不可といふことで、一門の伊達左兵衛、及び伊達彈正などをついだ。殊に一門中でも二萬六百石の知行をとつて學問もあり、なかゝの遣り手であるといはれた伊達安藝をも煽つた。さうして先に奥山が六箇條の事を申立て、其意見を貫いたのは、伊達家にとりては長く忘れられぬ功績であると云はれたのであるけれども、今となりて反對派の者に云はすれば、あれは奥山が自分の位置を維持するために他の人を差退けて一人で出掛けたのであつて、誠に卑劣な遣り方であるとけなすやうになつた。かやうに國論が沸騰して、慙むべし、奥山は讒謗罵詈の中心になつたのである。しかし奥山の黨と雖も此時に至るまで其勢力はなかゝ強いもので、決して侮られない。伊達の一門では伊達安房宗實が居た。これは奥山の黨であつたらしい。これは忠宗の子息で綱宗の兄である。但し奥山の最も大なる最も有力の援助者は、無論、立花左近將監であつた。片倉小十郎なども中立の姿に見えたけれど、寧ろ奥山の味方といつて可い。特に此時の役人連は、則ち今の詞で云ふ官僚は大抵奥山の一派である。それ故に奥山もめつたに負ける氣遣ひはなかつたのであるが、だんゝ國論がさわがしくなるにつれて、唯だ公なる政事上の批難ばかりでなく、更にまた奥山の私行にわたつて人身攻撃をするものも出來た。例へば奥山といふ人は酒や女にふけて品行が甚だわるいとか、或は平生の生活が贅澤を極めて居るとか、何んとか角とかいろゝと攻撃を加へた。尤も奥山の方の考へ

にして見ると、當時天下は泰平無事で能役者などを召ぶことの盛に流行る世の中であれば、仙臺のやうな邊鄙の土地では吝なことばかりを云つて居てはいけない、多少奢つたことも遣つて見せねば、唯だ世間から馬鹿にされるのみでなく、此の財政甚だ困難の折柄であれば、儉約一點張にはすべての繰り廻しがつかないといふ理由も必ずあつたと思はれる。だが何事にも幾分の理由が必ず有つたにしても、一旦國論がわい／＼さわぐやうになると、兎角それが人の耳に入り難くなるもので、其人の權勢がちよつと傾きくづれかゝると、しそこなひを傳へる悪い評判ばかりが大きくなり易いものである。これは丁度寛文元年九月十七日のことであつた。この日は東照宮大權現の御祭り日であつて、仙臺でも諸國の例に倣ひこの御祭りをやるのである。然るに、此日にあたりて奥山が何處ぞへ鷹狩に出ていつて宮參詣をしなかつたといふことが大層な噂となつた。これは今日ならば不敬事件で反對黨を攻撃するやうなものだ。それから又或は、奥山は常に男色にふけり或る絶家を繼がす爲めに、自分の一人の美少年を其家の婿養子にしたなどいふ事も傳へられた。斯様にその騒ぎは中々一通でなかつた。これらの談のうちには無論本當なこともあらうし、又嘘なことも混つて居るだらう。しかし兎に角奥山といふ奴は悪い政治をする奴である、自分の氣に入る者には無暗に知行を増してやつたり、或は能役者其外下らぬものを取立て、馬鹿な金をつかつて、一向國用のふえることに頼着しないで、それで居て金が足りないなどと云ふのは實に怪しからぬことである。今や家中の者どもは重ね／＼の用金取立の爲めにひどく難儀を極めて居るのに、奥山の意見で此上尚ほ又加役を割當るなどといふことは誠に以ての外の事であるといふのでさわがしくなつた。丁度此時のことである。いよ／＼奥山の意見が通りさうになつて兵部少輔から常の物成りでは國用が足りないやうになつたから、家中に加役を申付けねば

三 絶家 相續する者が無く、絶えた家。

四 國用 國の費用。國費。

五 物成り 江戸時代の年貢。

ならぬ様子だが、それについて家中一統（六）に存寄（七）を申す様にとの通達があつた。其時伊達安藝（八）の申し出したは、某辱（九）くも御一門の列に在りながら國家の御難儀（一〇）の極に至りたるを座（一一）ながら見て在らんこと誠に堪へ難き儀なり、あはれ某（一二）が知行する所の地をば盡く獻上（一三）し奉るべければ、加役を以て疲弊を極めたる御家中を難儀せしめらるゝことだけは御止まりあつて然るべき歟（一四）、某などは親族の食客（一五）となつても世は安く送らるべければ此願意御採用下されたと云ひ出した。さうすると例の伊達左兵衛（一六）もさういつて出るし、又中島伊勢も伊達安藝と同じ様に申出でて、各其知行を差上げても取立を増すことはいけませんまいと云ひ張つた。事がかくまでになつては迎も奥山の地位をそのまゝにして措けるものでない。そこで已むことを得ず奥山を退役（一七）さしてしまつた。さうして奥山反對の首領茂庭（一八）を再び入れて奉行にしたのである。畢竟此政權の移轉は黨派の消長に依つて定まつたと云つても善い譯であるが、これで事がすめばまだしもよかつたけれども、此處（一九）に又一つ困つたことが出來た。それは從來のやうな政治の仕組ではとてもいけないと云つて、更に眼附（二〇）といふものゝ權力を重くして政務に對する監督を大いに嚴重にしたことである。これがそも／＼伊達騒動の根原（二一）であると思はれる。その時に渡邊金兵衛と今村善太夫（二二）とそれに里見正兵衛といふ此の三人を眼附役の中から選り抜いて殆ど後見直屬（二三）とも云ふべき重い任務を與へたのである。その任務としては凡そ三つの重なる箇條があつた。第一は家中總體（二四）に悪い事があらば、一門一族（二五）一家たるに拘らず其他如何なる人に悪い事があつても之れを委しく兩後見（二六）に申出ること。第二には兩後見（二七）に悪い事のあるときも矢張同じく申出ること。第三にはもし家老の裁判に曲つたことがあればよく忠告して、それでも尙ほ聞かないときは嚴談（二八）に及んで裁判を公平にさせること。この三つである。伊達騒動の起つたのは斯様に家老の權力が目附に移つたのが根本で

六 存寄 意見。所存。

七 一門一族一家 伊達家家臣の家格。最上

級を一門、次に一家、准一家、一族、着座、

太刀上、召出、大番組（平士、組士（下

士）と續く。

あると思はれる。